

越境する「日本人」

異国の親族と出会う

私は米国で、親族の刻んだ130年の歴史をたどった。時に差別を受けるなど「マイノリティー(少数派)」としての苦勞もあつた親族。彼ら彼女らの歩みは現代日本に暮らす外国ルーツの人々とも通じる。日系米国人の経験は、多様な人々との共存に向けてどんな教訓をもたらすのか。文化人類学者で日系米国人を研究する京大人文科学研究所の竹沢泰子教授に聞いた。

—1880年代後半から日本人の米
国移民は活発になった。
「中国人の移住を禁じた法律が1882年に米国で制定されたことが背景の一つにある。中国人が労働力として白人と競合したため、中国人の穴を埋める形となった日本人の移民は当初歓迎された。移民した人は多様で、労働者だけでなく学生もいれば徴兵逃れの人もいた。当初は男性中心だったが、後に女性移民も流入した。ただ排斥運動も強くなり、例えば多くの日本人が雇われた靴職人の仕事も白人の厳しい抵抗にあつた。都市部から離れた所に住む人は、農業に活路を見いだすケースも多かった。さらに1924年に新たな日系移民を事実上全面的に禁じる

Interview 竹沢泰子教授(京大人文科学研究所)

移民への差別 日本でも

法律がつくられた
—排除の理由は労働現場での白人との競合か。

「非白人への人種差別も無視できない。ただ実は白人の定義は曖昧だ。1910年の米国の国勢調査によれば、欧州出身者だけでなく約400人の日本人が『白人』として市民権を得てい

た。ところがその後の経済的あつれきを経て、22年の米最高裁判決では、日本で生まれたオザワ・タカオは『白人ではない』とされ、日本人移民が市民権を得る道は戦後まで閉ざされた」
—人種差別の延長に日系人の強制収容所がある。
「そう考えていい。ドイツ系やイタ

外国にルーツを持つ人は その文化や歴史に誇りを抱く



「ルーツを理由とした差別は決して許されない」と竹沢教授は強調する(京都市中京区)＝撮影・松村和彦

リア系は、日本と同じく祖国が米国と戦争していたにもかかわらず、一般人は強制収容所に行かなかつた。日系人の間で収容所の記憶は封印されていたが、1970年頃から黒人運動などに触発された3世らが収容所の歴史を調べ始め、2世も沈黙を破って証言し、88年の米政府の謝罪につながった」
—私が会つた米国の親族は日本というルーツを強く意識していた。

「マイノリティーは自身のルーツを意識しがちなものだ。日本でも、朝鮮半島やフィリピンなど外国にルーツを持つ人の多くはその文化や歴史に誇りを抱いている。他方、日本とルーツの国の関係に翻弄され、偏見を抱かれる場合もある。在日ロシア人の一部が嫌がらせに遭っている今、私たちは、米国内日系人の経験から、国内の隣人に対するルーツを理由とした差別は決して許されないことを、教訓として心に刻んでおきたい」
(広瀬一隆) 〓おわり

米国への取材は、京都新聞社がスマートフォンニュース社の「フェローシッププログラム」の助成を受け、昨年11月に行つた。